

ショートコメント vol.105 (2018年4月20日)

テーマ：18年1～3月の訪日客の消費にみる円高の影響
 ～訪日客1人当たりの消費は為替との連動性が高い～

●直近のインバウンド市場の動向

観光庁の発表によると、2018年1～3月の訪日客の旅行消費額は、前年比で17.2%増の1兆1343億円となった(図表1)。4四半期連続の1兆円を超えとなるが、1～3月期に1兆円を上回ったのは初めてである。

消費額が順調に増えている背景としては、やはり訪日客の増加による寄与が大きい。この1～3月も762万人が日本を訪れ、前年比で16.5%増と好調を維持する形となった。中国、韓国などの東アジアを中心とした訪日客の増加により、いわゆる春節商戦も年々盛り上がりを見せている。

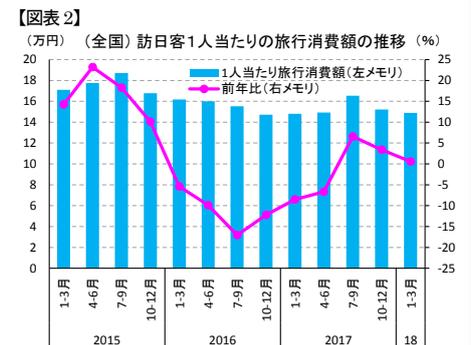


●1人当たりの旅行消費額は一進一退

一方、1人当たりの旅行消費額については、必ずしも増加が続いているわけではない。図表2のとおり、2015年7～9月をピークとして一進一退の動きをみせている。このところは前年比でプラスを維持しているものの、伸び率は縮小傾向にある。この1～3月は0.6%増と、ほぼ横ばいに近い状況であった。

数年前のいわゆる爆買いブームが一巡し、訪日客の嗜好がモノからコトへと変化するなか、消費が一本調子で増えにくくなっていることも事実であろう。

それに加えて、為替との連動性にも注意する必要がある。



●1人当たり旅行消費額と為替の連動性

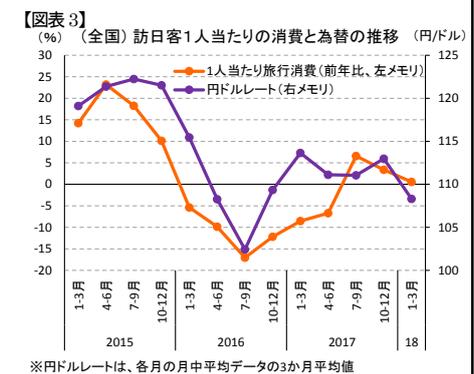
図表3は、訪日客1人当たりの旅行消費額と為替の推移をみたものであるが、両者には一定の連動性がみられる。つまり、円安になれば消費が増え、円高になれば減るといった関係である。

訪日客が旅行の予算を自国通貨で考えていた場合、為替の変化は、円ベースでの予算が変わることを意味する。来日後に使えるお金は、円安時よりも円高時のほうが少ない。

思い起こせば、消費が大きく前年割れした2016年7～9月も、一時1ドルが100円台となるような円高局面であった。

今後の為替の推移について、現状レベルであれば問題ないとみられるものの、1ドルが105円を下回り、100円に近づくような動きが続けば、訪日客の消費に与える影響を注視する必要がある。

訪日客の増加率がかつてほど大きくないだけに、1人当たりの消費額の減り方によっては、訪日客の消費全体が前年割れとなる事態もありえよう。



本件照会先: 大阪本社 荒木秀之
 TEL:06(4705)3635 mail:hd-araki@mri.co.jp

※本稿は情報提供が目的であり、商品取引を勧誘するものではありません。また、本稿は当社が信頼できると判断した各種データに基づき作成しておりますが、その正確性、完全性を保証するものではありません。なお、本稿に記載された内容は執筆時点のものであり、今後予告なしに変更されることがあります。